
Fate/stay down

有機

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y d o w n

【Nコード】

N 0 4 4 6 J

【作者名】

有機

【あらすじ】

北の地で行われる、新たな聖杯戦争。

魔術師達は時空を越えた、規格外の英霊……サーヴァントを呼び出し、万能の釜である聖杯を求めて戦いを繰り広げる……

プロローグ（前書き）

この小説はTYPE-MOONの世界に様々な作品をクロスさせた作品です。

聖杯戦争も原作どおりに進むわけではありません。聖杯戦争というシステムに基づいて書かれています。

そういったのが嫌いな方は、読むのをお止めください。

プロローグ

— F i r s t

コトの始まりは、日本の由麻市にある葉已谷邸と呼ばれる屋敷に鳴り響いた、一本の電話が原因だった。

とりあえず、俺はその時のことを回想し、今の事態の対策を立てたいと思う――

「逸樹^{いつき}ー！！ 電話来てるわよー！！」

階下から響き渡る若い女の声の主の名は佐藤^{さとう}真菜^{まな}。

名字こそ違うが、歴とした俺の姉であり、同時に秘書でもある。

ただし、物静かで知的な眼鏡の似合うクールな女性という偶像とは大きくかけ離れた――

「何失礼なことを言っているのかな？」

「ちよっ！？ 痛い痛い痛い！！ あ、コントローラーは踏まないで！！ 二時間ノーセーブで……あ、ああああああっつつ

!?
」

えー……見苦しい回想は飛ばそう。

本題に入った時のところから回想に入る。初めからそうすれば良かった。

俺は受話器をとり、電話の主の声を聞く。

「こちら葉已^{はのみや}谷商会ですが、どちら様ですか？」

『魔術協会の者ですー（注※英語で喋っていますが、作者の英語スキルはEランクを大きく下回るので、日本語で書いております）』

「……魔術協会？　なんの用だ？ー（注※英語で喋っていますが以

下略)」

相手は魔術協会。おおよそ全ての魔術師が所属する、神秘の管理と隠蔽を専門とする一大組織。

相手は英語だったので、恐らくロンドンにある研究機関、時計塔だろう。

『非常にお恥ずかしながら、依頼を請け負っていただきたいのです』

遠回しにバカにされた気がするのは気のせいかな？

『聖杯を回収していただきたいのです』

ここで俺の頭にはまず、聖杯に最も関連すると思われる円卓の騎士団の話に登場するアレが思い浮かぶ。

向こうに聞いてみたが、どうやら違うらしい。

『我々が貴方に依頼するのは、とある都市で行われる儀式にて降臨すると言われているモノ……聖杯と呼ばれているソレを回収していただきたいのです』

「そいつは、危険なのか？ それと、そいつは持ち帰りができる代

物なのか？」

『我々としても、その事については一切知らないのです』

情報は無し……か。

「いくらだ？ その聖杯とやらを持ち帰った報酬額は」

『そちらの希望額を、こちらの用意できる金額で払わせていただきます。

報酬は後払いです』

「了解した。聖杯の件は全面的にこちらに任せていただく。後で契約書を送るので、それに証印とサインをして待っていていただきたい。後、出来る限りの資料を」

そこまで言うと、俺は受話器を置き、部屋へ戻る。

この後何があったかは大したことは無いので省略させてもらう。

簡単に言うならば、旅行の用意と旅行先の宿の予約などの下準備。

その他、自身の戦闘用の魔術礼装―（魔術師の武装のこと。アミュレットや呪詛を刻んだ武器などがある）を鞆に詰め、そのままベッ

ドで寝たというものだった。

——そして、今俺の目の前には……………

「どこだここは……………」

目的地のホテルではなく、寂れた孤児院の前まで来ていた。

「……………」（汗）」

どういうことだろうか。

自分の方向音痴は今に始まったことではないが、駅から十数分のホテルに着かず、数十分近くかかるこの孤児院に着くなど、到底あり得る話ではなかった。

大体この孤児院自体、複雑に入り組んだ路地の先にある住宅街の外れにあるのだ。

ホテルに辿り着くにはこの路地を通らなければ行き着けないのだが、
どういうわけか何度試してもこの孤児院の前まで戻ってしまっていた。

「おかしい……おかしすぎる」

本来ならあり得ないこと……日常では発生し得ない事象……いわば、
超常の神秘

「魔術……か？」

孤児院を見上げる。

薄暗くなり、夕日を背に受けて大きな影を落とす孤児院は、吹いて
きた風の影響もあってか、とてつもなく不気味に見えた。

「――（心の声…もしも、人寄せの魔術をかけた施設なら、術者本人
がいる可能性があるな。
その場合、既に俺自身が引っ掛かったことは術者に知れているだろ
う。だったら……）」

俺は孤児院の門を開け……

《リー……ン》

チャイムを鳴らした。

……。

……。

……。

……。

……。

「……遅いな」

誰も出ない。

単に誰もいないのか、または居留守でも使っているのだろうか？

諦めて背を向け、扉の前に座り込む。

……ただ一言、言わせてもらおう。

「寒……」

ちなみに、現在地はH海道にある葛城市カツラギという地であり、日本の最北端に近い位置にあるこの都市で、N県ユウマ由麻市から来た俺の軽装では、しんしんと降り積もる雪からほとんど身を守れていない。

冗談じゃない。任務初日で凍死なぞ、笑い話にもなるか。

「し、死んで……たま、るか……」

温度遮断の魔術を行使し、これ以上体が冷えるのは防ぐ。

ただし、ここからが問題だ。俺は火属性魔術なぞ使えない、イコール体を暖める手段がないわけだ。

大変拙い。

死にたくはないが、生きれるだけの力に残されていない。

「この地が、俺の死か……」

意識を手放し、さっさと楽な奈落の闇に堕ちてしまおうとした時だった。

「い、いらっしやいませ……」

顔を上げた先にいたのは、買い物袋とおぼしき手提げ鞆を抱えた少女だった。

少し短めの肩にかかる程度のショートカットで、暖かそうなコート、マフラー、手袋、ニット帽を着込んでいる。

「あの……………いらっしやい……………ませ……………」

なんとか声を出したかったが、口が動かない。

少女は心配そうに一定距離を開けながら、顔を覗き込む。

《ペタ》

少女の手が、俺の頬に触れる。

とても暖かい。たとえ頬だけであり、人間の体温程度の温度とはいえ、凍えた体には心地いい……………気がした。

実際は温度遮断によって温度を感じないので、暖かいというのは単なる妄想だった。

しかし、そんな妄想ですら俺の消耗しきった体力と精神力の前では十分な温度であったため、あえなく俺の意識は落ちていった。

以上、1998年、11月下旬。
聖杯戦争から3年前の出来事だった。

—— Another side ? A ?

とある国の地下——他者かに見つかることなど、それこそ一大
機関の探査装置でもなければありえない場所にて。

「……………とうとう、この日が来たか」

軍靴を鳴らし、冷たい金属の床を踏んで一人の男が奥にある部屋へ
向かう。

この男は名前を、クラウド・クラウドゼリツツという。
この機関において、ありあとあらゆる様々な指令を的確にこなし機
関からの信頼も高いことから、22歳という若さで出世街道を邁進

している人物である。

やがて部屋にたどり着き、扉をノックすると、若い女の声が返ってきた。

「入れ」

「失礼します」

部屋に入ると、中には軍服を着込み、テーブルに足を乗せて組み、拳銃の整備をする金髪の女がいた。

クラウスの上司である、アルマ・レーデル（28歳・独身）であった。

「あまり堅くなるな。楽にしろ。
名前は何？」

「クラウス・クラウゼリッツ軍曹であります」

「よろしい。」

さて、君が呼ばれた理由はわかっているね？」

「はっ」

敬礼し、クラウドスはテーブルの上に置かれている小包を見る。

それには、かつてとある機関に所属し重大な密命を受けて調査を続け、そして消息を断った、一人の男の遺物が入っているはずなのだ。

「君には、この聖遺物に縁のある英霊——サーヴァントを使役し、聖杯戦争に参加してもらう」

そう、今回の指令とは『聖杯戦争』という極東の地で行われる戦いに赴くことであった。

この聖杯戦争とは、魔術師達の戦いである。

そして、クラウドスは古い魔術師の家系の末裔でもあった。

「よろしい、軍曹。」

さて、君が呼ばれた理由はわかっているね？」

「はっ」

敬礼し、クラウドスはテーブルの上に置かれている小包を見る。

「そいつを使えば、恐らくは……………無敵の宝具を持つサーヴァントを召喚できるはずだ」

「無敵の、宝具……………」

喜びに、クラウドは自身を震わせた。

アルマは小包を手に取り、クラウドに差し出す。

「クラウド・クラウゼリッツ軍曹。今回の貴殿の任務の復唱を」

「はっ。聖杯戦争に勝ち抜き、聖杯および英霊達の宝具の力の一端を入手することあります」

「そうだ。たとえ聖杯は得られずとも、英霊の切札である宝具の力を入手し、我が国の新兵器として活用するのが今回の任務の本題だ。

達成、してくれるな？」

「命に賭けまして、任務を達成いたします！！」

「……………頼んだぞ」

クラウドは小包を受け取り、一礼して部屋を出る。

廊下を歩きながら、途中にあったガラス窓を見て自分がずっと笑っていたことに気付き、ポケット内の勲章を握る。

そして、犬歯を剥いた凶悪な笑みを浮かべ、施設を出ていった。

1996年、8月上旬。
聖杯戦争開始から5年前の出来事だった。

— Another side ? B ?

「要するにだ。同盟を結びたいのだよ、レティ」

豪華な椅子に腰掛け、目の前で優雅に紅茶を飲むレティと呼ばれた女性に、義手義足の男エリック・ヴェルデは申し出た。

二人は錬金術師と魔術師の大家、その当主と跡継ぎであり、同時に幼なじみでもあった。

「聖杯戦争……ですか」

「ああ。君は御三家であるジェヴォーダン家の当主だ。
だが、錬金術師だからどうしても、一流か一流並の魔術師と比べれ

ば戦力的に弱い。

そして、僕は執行者。いざとなったら君を守りながらも戦える。でも、それでも確実に勝利を掴み取るために君と同盟を結びたい。

どうだ？ 悪い話じゃ無いと思うよ」

「……………」

黙り、残った紅茶を飲み干してからティーカップを置いた。

そして、エリックの目をまっすぐに見つめ、口を開く。

「お断りします」

「っ!？」

驚愕に目を見開き、エリックは息を飲む。

「私は自分の力を熟知しています。戦力で勝てない相手には戦略で勝ち、勝つ要素が無い相手とは戦いません」

その思想は、錬金術師に共通する思想である。

しかし、当然ながらエリックはそういったことも熟知していた。

「だが……………単独なら、僕と組んだ方が勝率は上がるはずだ」

「葉已谷逸樹」

「いきなり何を…………ん？　ちょっと待て。今？　葉已谷？　と言ったか！？」

「ええ。葉已谷逸樹。先代葉已谷家当主、葉已谷秀樹の息子。今回、協会の指令を受けて彼もマスターとして参加するそうよ？」

「葉已、谷…………！！」

ギリッと歯を噛み締め、拳を握る。

心の奥底から膨れ上がる怒りが魔術回路を刺激し、義手である左腕から光が漏れ始める。

「なら、尚更だ！！　僕と同盟を結んで、勝とう！！」

アイツにだけは負けるわけにはいかない！！」

「嫌。そういうところがあるから、エリックとは組みたくないのです。

きつと、怒りに任せて罨が強いサーヴァントが相手だろうが突っ込んでいくに違いありません」

「いや、そんな、こと、は……………」

「弁解はその刺々しい魔力を抑えてからしなさい。

まあ、弁解しても私の意見は変わりませんが」

「……………」

そこまで言われると、とうとう黙って俯いてしまった。

「エリックは、先代葉已谷に腕と足をもがれてエリートになる道を閉ざされた。失意と絶望のまま、自殺しようともしていた。

それを私が、特殊な義手と義足を作って助けた。

貴方の怒りは解る。でも、お願いだからやめて。一度拾った、貴重な命を捨てるような真似をしたら、どうしようもなく私は悲しい……………」

「!?!」

その言葉の真意を推測し、まさか、といった不安そうな情けない表情の顔を上げる。

「聖杯戦争には、参加しないで」

レティこと、レティシアは涙を目に溜めて潤んだ瞳を、悲しそうな表情と共に幼馴染み《エリック》に向けた。エリックにとって、それは、『戦力外通知』を突きつけられたに等しかった。

「……………お話は、以上です」

そう言い終えると、エリックは立ち上がって逃げるように外へ駆け出していった。

「……………ごめんなさい……………エリック……………貴方の、為なの……………」

その後ろ姿を見て、レティは窓際にへたり込み、涙を流した。

そして……………

レティが聖杯戦争に参加するための、『身心』の『最終調整』を行うために専属のメイドに呼ばれるのと、

エリックがぶつけようの無い怒りのままに英霊を召喚する為の触媒を探すよう家人達に命令したのは、

奇しくも同じ時間だったことは、誰も知らない。

2000年、4月中旬、聖杯戦争開始まで一年を切った頃の出来事だった。

プロローグ（後書き）

誤字脱字、その他おかしい所があったら指摘してください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0446j/>

Fate/stay down

2010年10月11日13時23分発行